



ドイツ神話学派によるツヴェルク伝説の解釈 - 伝説集のテキスト分類と配列が描く神話世界 -

馬場, 綾香

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-09-25

(Date of Publication)

2019-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7257号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007257>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 馬場 綾香

専攻 文化相関専攻

指導教員氏名 坂本 千代

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

ドイツ神話学派によるツヴェルク伝説の解釈

- 伝説集のテキスト分類と配列が描く神話世界 -

論文要旨

本研究は「ドイツ神話学派」の伝説集におけるツヴェルク(こびと)伝説の配列を分析することで、神話学派が伝説解釈を通して見出した「神話」の内実を明らかにすることを目的とする。神話学派はツヴェルク伝説をはじめとする伝承テキストを解釈に基づいて分類し、その解釈を伝説集の配列に反映させることで編者の理想とした神話世界を描き出した。今日、神話学派のこうした伝承研究は誤謬として批判されている。しかし、本研究ではむしろ神話学派の解釈と分類を19世紀ドイツ語圏の文脈の中に置き、時代の要求に合わせた新たな「神話」というひとつの文化的財産を生み出した活動として再評価することを目指す。19世紀ドイツ語圏という環境の中では、神話学的に伝承を解釈することに意義があったと考えられる。伝承文学は従来「フォルク」(民衆/民族)という担い手に焦点を絞って研究されてきた。本研究ではこれと異なる新たな担い手として知識人の一派であるドイツ神話学派に着目した。

ドイツ神話学派とはグリム兄弟の門下生を中心とする19世紀の神話学者・民間伝承研究者の一派である。伝承蒐集と保存の必要性を周知させ、後の比較神話学の基盤を築いた。神話学派の記録・蒐集活動を通して資料として信頼に足る伝説集が刊行され始めた。本研究では学派の初期の研究者が編纂した伝説集からヨーハン・ヴィルヘルム・ヴォルフ『ニーダーランドの伝説』(1843)、カール・ミュレンホッフ『シュレーズヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク諸公領の伝説、メルヒェン、歌謡』(1845)、エミール・ゾンマー『ザクセンとテューリングンにおける伝説、メルヒェン、習俗』(1846)、フリードリヒ・パンツァー『バイエルンの伝説と習俗：ドイツ神話学への寄与』(1848/55)、アダルバート・クーン『マルクの伝説とメルヒェン』(1843)を分析対象とした。

第1章ではグリム兄弟『ドイツ伝説集』(1816/1818)におけるツヴェルク伝説の配列と兄ヤーコブ・グリム『ドイツ神話学』(1835)の記述から、グリムがツヴェルクとツヴェルクに類似した伝承の登場人物とに読み取った神話的ルーツについて論じた。グリムはコーボルト(家の精)、水の精、森の精といったツヴェルク的な精霊と共に「エルベ」概念の下に把握している。エルベとは北欧神話の霊的存在である。グリムはエルベ的存在の背後に総じて古代ゲルマン(≒「ドイツ」)の神話を読み取っている。しかし同時に個々の異なるルーツを論じることで、これらの存在を区別している。

第2章ではテキストをジャンルによって分けた伝説集から、ツヴェルクの物語が「メルヒェン」ではなく「伝説」として、即ち神話学派が「史実ではないがフォルクは実話と信じている物語」と定義したジャンルとして分類されなければならなかったことを明らかにする。神話学派のジャンル定義においてはかつて存在した神話が崩れて伝説になったとされ、ツヴェルク伝説は伝説の中でも特に古いカテゴリーと期待された。このジャンル定義により、ツヴェルク伝説の実際の信憑性は不明だが、理念上は真摯に信じられていることになり、「フォルクが信仰している神話世界」という理念を創出した。

第3章では地域基準配列の伝説集から、個々の地域におけるツヴェルク伝説が「ドイツ」内の他の地域におけるツヴェルク伝説との共通性を強調し差異を捨象する形で記載されていることを明らかにした。神話学派の提唱した地域間比較とは「ドイツ」(かつてドイツ語圏であったと想定される地域)とそれ以外との比較を意味し、「ドイツ」内部では差異よりも共通性が重視された。この論法により、伝説の背後にある「神話」とはかつて「ドイツ民族」が共有していたひとつの神話と想定されることになった。

第4章では内容基準配列の伝説集からツヴェルクと家の精・水の精・森の精・女性の霊的存在との分類について分析し、これらの登場人物に自然神話の世界観が仮託されていることを明らかにする。伝説集の中ではツヴェルクとコーボルトが共に自然の精霊としてまとめられていた。ツヴェルク及びコーボルト伝説の背景に自然信仰の世界観を想定することで、神話学派における「神話」概念の指す意味内容はグリムの「ゲルマン神話」から「自然神話」へと拡大した。ゲルマン神話を自然神話という大きなカテゴリーの一部と捉えることで、ツヴェルク伝説の持つ意味も拡大している。

神話学派の伝説集の中でツヴェルク伝説の背後に解釈された神話世界とは(1)現在も信じられていて(2)「ドイツ」全土に共有されている(3)自然信仰の世界であった。この内(1)と(2)は、実際には成り立たないにも拘わらず神話学派がグリムの理念を継承し定着させたものである。そして(3)は神話学派がグリムの「ゲルマン神話」理念を「自然神話」へと拡大解釈したものである。グリムはゲルマン神話の世界にドイツ語圏の民間伝承を結び付けて論じることで「ドイツ」の伝説をゲルマン民族の文化的伝統の中に位置づけた。神話学派は同じ手法を取りつつ、さらにゲルマン神話をも自然信仰として読み替えることによって、自然信仰という世界観の中に「ドイツ」の伝説を位置づけた。神話学派はグリムの解釈に基づきつつ、これを誇張した形で彼ら自身の理想とする神話世界をツヴェルク伝説から描き出してみせた。神話学派の活動理念は古い神話の復元であったが、実際に行ったことは19世紀ドイツ語圏における知識人の理想を反映した新たな「神話」の創出であった。

論文審査の結果の要旨

氏 名	馬場綾香		
論 文 題 目	ドイツ神話学派によるツヴェルク伝説の解釈 ―伝説集のテキスト分類と配列が描く神話世界―		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委 員 長	教授	野谷啓二
	委 員	教授	西谷拓哉
	委 員	教授	坂本千代
	委 員	京都府立大学文学部准教授	横道 誠

要 旨
本論文はドイツ神話学派を対象とした日本では初めての本格的な研究であり、彼らの伝説集におけるツヴェルク（こびと）伝説の配列を分析することで、神話学派が伝説解釈を通して見出した神話の内実を明らかにすることを目的としたものである。 第 1 章ではグリム兄弟の『ドイツ伝説集』におけるツヴェルク伝説の配列と兄ヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』の記述から、グリムがツヴェルクとツヴェルクに類似した伝承の登場人物とに読み取った神話的ルーツについて論じている。グリムはコーボルト（家の精）、水の精、森の精といったツヴェルク的な精霊と共に「エルベ」概念の下に把握し、その背後に総じて古代ゲルマンの神話を読み取っているが、同時に個々の異なるルーツを論じることで、これらの存在を区別していることを本章では詳細に論じている。 第 2 章では神話学派の、テキストをジャンルによって分けた伝説集から、ツヴェルクの物語が「メルヒェン」ではなく「伝説」として、即ち神話学派が「史実ではないがフォルクは実話と信じている物語」と定義したジャンルとして分類されなければならなかったことを明らかにしている。このジャンル定義により、ツヴェルク伝説はその実際の信憑性は不明だが、理念上は真摯に信じられていることになり、「フォルクが信仰している神話世界」という理念を神話学派が創出したことが詳しく論じられている。 第 3 章は、神話学派の地域基準配列の伝説集において、個々の地域におけるツヴェルク伝説が「ドイツ」（かつてドイツ語圏であったと想定される地域）内の他の地域におけるツヴェルク伝説との共通性を強調し差異を捨象する形で記載されていることが明らかにされている。この論法により、伝説の背後にある神話とはかつてドイツ民族が共有していたひとつの神話であると想定されるようになったことが述べられている。 第 4 章では神話学派の内容基準配列の伝説集からツヴェルクと家の精・水の精・森の精・女性の霊的存在との分類のされ方について分析し、これらの登場人物に自然神話の世界観が仮託されていることが明らかにされている。伝説集の中ではツヴェルクとコーボルトが共に自然の精霊としてまとめられており、ツヴェルク及びコーボルト伝説の背景に自然信仰的世界観を想定することで、神話学派における神話概念の指す意味内容がグリムの「ゲルマン神話」から「自然神話」へと拡大したことが論じられている。 本論文は、ドイツの伝説・神話研究史の今までの流れを踏まえたうえで、独自の立ち位置を模索する並外れた努力の成果である。用語の緻密な定義づけ、社会学的観点からの考察、キリスト教との関係などについてさらに深めるべき点は残っているが、ツヴェルクというひとつの対象をスタート点として、ドイツ神話学派の果たした役割を 19 世紀ドイツの文化的状況の中で解釈した独創的な研究であり、その成果はドイツ文化研究に非常に重要な知見を示したものとして評価できる。よって、馬場綾香氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。 なお、馬場氏には以下の論文 5 編（うち査読付きは 4 編）があるほか、学会・研究会での口頭発表が 7 件ある。 〔論文・査読あり〕 1. 馬場綾香『『中世末期ドイツの民間信仰』における〈エルベ〉—ヴィル＝エーリッヒ・ボイ

カートの〈エルベ〉概念―」神戸大学国際文化学研究科『国際文化学』第28号、pp49-71、2015年

2. 馬場綾香「ヴィル＝エーリッヒ・ポイカートの〈エルベ〉概念」説話・伝承学会『説話・伝承学』第24号、pp109-121、2016年
3. 馬場綾香「ドイツ神話学派の伝説集におけるツヴェルク伝説の配列」神戸大学国際文化学研究科『国際文化学』第31号、pp111-131、2018年
4. 馬場綾香「ドイツ語圏におけるツヴェルク伝説の地域分布」説話・伝承学会『説話・伝承学』第26号、pp109-121、2018年

〔論文・査読なし〕

5. 馬場綾香「〈伝説〉と〈メルヒェン〉にみる〈神話〉―ドイツ神話学派のジャンル定義を通して」植朗子・清川祥恵・南郷晃子編『〈神話〉を近現代に問う』pp101-113、2018年

〔課程博士用〕